

国際イモ年を振り返って

いも類振興会 理事長 狩谷 昭男

食料確保や貧困軽減に役立つジャガイモの重要性について、世界の関心を集めることを狙いとした「国際イモ年」(International Year of the Potato 2008)の企画は、2005年にペルー国などが国連総会に提案し採択された。その実施は、国連食糧農業機関(FAO)へ委託され、2008年には各国で様々なイベントが行われた。

日本では、サツマイモもその対象とし、全国で国際イモ年に相応しいイベントが開催された。マスコミ関係者からも、いも類に関心を寄せていただき感謝している。(財)いも類振興会では関係者の協力を得て、幾つかのイベントを共催し、いも類に対する国民の理解に寄与できたと考えている。

わが国では、3つの主なイベントがあり私も参加した。1つは横浜市のパシフィコ横浜で開催された「国際イモ年シンポジウム」(2008年11月9日、230名参加)、2つは東京の虎ノ門パストラルで開催された「食のブランド・ニッポン2008—食材紹介セミナー(ジャガイモ・サツマイモ等)—」(11月11日、245名参加)、3つは札幌市の共済ホールで開催された「ポテトフォーラム2008」(12月12日、400名参加)である。

いずれの催しも多数の参加者があり、有益な講話や活発な交流が行われ、いも類に対する関心の高まりが伺えた。2008年秋から国際金融危機、深刻な経済不況が同時進行している中で、ジャガイモやサツマイモ

をめぐる環境は、比較的安定しているといえよう。国際イモ年を契機としたジャガイモやサツマイモに対する再評価ともいえる動きの背景には、「食料安定供給への期待」と「国民の高い健康志向」という2つの潮流がある。

ジャガイモ、サツマイモとも、日本に伝播して約400年の歴史を有する。この間、いも類は飢饉や貧しさに対応するなど、その貢献度は高かった。逆に、そのことが経済成長下では、マイナスイメージに結びついていった。だが、近年ではマーケティング対応等も進み、マイナスイメージが徐々に払拭され、ややプラスイメージに変化しつつあることは喜ばしい。21世紀に入り、世界的な食料供給の不安定化、地球温暖化などの環境問題が顕在化しつつある今日、いも類の元来有する旺盛な生命力と幅広い適応力は、今後、食料安定供給の面で生きてくるにちがいない。

もう1つの明るい材料は、国民の高い健康志向だろう。人が健康に生きていくためには、三大栄養素の炭水化物、タンパク質、脂質に加えて、ビタミン、ミネラルを含めた五大栄養素の摂取が必須だ。いも類は、栄養価、機能性に富んだ優れた健康食品であり、その消費拡大に期待したい。

国際イモ年を振り返ってみると、主観ではあるがジャガイモ、サツマイモとも前途にやや明るい兆しを感じられ、私は大変元気づけられた。